

「北海道の離島における自然・歴史・文化に関する研究」中間報告

尾曲香織・圓谷昂史・表 溪太・亀丸由紀子・鈴木明世・鈴木あすみ

Key Words

奥尻島 (Okushiri Island)、民俗 (Folk customs)、建築史 (Architectural history)、アイヌ文化 (Ainu culture)、動物相 (Fauna)、漂着物 (Marine debris)

1 はじめに

本稿は、北海道博物館で実施している「北海道の自然・歴史・文化」総合研究プロジェクトの研究課題の一つであり、2019年度より5年間の計画で開始した「北海道の離島における自然・歴史・文化に関する研究」について、その進捗を報告するものである。

当館の前身の一つである北海道開拓記念館では、1971年の開館以来、北海道の自然と人間との関わりについて自然史的側面と歴史的側面から明らかにすることを目的とした地域研究がなされてきた（北海道開拓記念館 1978、1981、1993など）。そして1980年から1984年には「離島社会の歴史と文化に関する調査研究」と題し、利尻・礼文・天売・焼尻という4つの離島で調査を実施した。その成果は『離島社会の歴史と文化』と題した報告書にまとめられた（北海道開拓記念館 1988）。報告書では、この調査の目的として、「漁労生活を中心に展開した離島社会の特色を歴史的に明らかにして、北海道の地域社会発達史の解明に寄与すると共に、離島社会の将来を考える際の基礎的資料を提示」することを挙げている（北海道開拓記念館 1988：p1）。同報告書中で、個別具体的な研究成果の公表となり、自然史と歴史、文化を総合的に明らかにすることができなかったことを反省点としているが、この当時、北海道の離島における信仰など生活史の分野の研究成果が乏しい状況にあったことを勘案すれば、十分評価すべきといえる。

本研究プロジェクトにおいても、北海道博物館内の複数の分野の学芸員、研究職員がそれぞれ個別具体的な研究成果を公表する。調査地は、上記の研究課題で対象とならなかった奥尻島とした。奥尻島に関する先行研究は、地学や土木に関連したものが多くみられる。一方で、生態学や海岸漂着物に関する研究は少ない。また、

民俗学や建築史といった分野では、1993年の北海道南西沖地震の影響に着目したものが多く、それ以前から現在にかけての歴史の変遷に着目したものは少ない。アイヌ文化については、アイヌ民族の居住の有無に視点が置かれてきたため、奥尻島が調査の対象となることがほとんどなかった。こういった状況を鑑みても、まずはそれぞれ現状を把握するための基本的な調査を実施し、公表する必要があるといえる。

これらに加え、それぞれの成果および研究の過程で得られた情報を、博物館資料学の視点からとらえ有機的に組み合わせることを試みる。併せて、成果の効果的な活用方法についても検討を行う。いずれの調査においても、位置情報が重要な要因のひとつであることから、GIS（地理情報システム）を使用した分析を行う予定である。

調査にあたっては、対象地域の博物館等における資料調査、現地でのフィールド調査及び聞き取り調査を行う。また、調査日程に合わせ、アウトリーチ活動の一環として、市民向け講座も現地の教育委員会等と協力し実施する。

2 調査の概要

(1) 調査内容と分担

本研究課題では、①島内及び周辺の各種生物の生息状況の把握、②化石貝類の発掘、③海岸の現生貝類及び漂着物の把握、④現在聞き取れる戦中・戦後にかけての民俗事象の把握、⑤集落や住居の形態とその歴史の変遷、⑥奥尻島とアイヌ文化の関わりを明らかにするとともに、⑦①～⑥の調査成果の効果的な活用手法を検討するため、次の通り分担し、調査を進めた。

①表（哺乳類）、鈴木あすみ（博物館資料学）

尾曲香織：北海道博物館 研究部 生活文化研究グループ
圓谷昂史：北海道博物館 研究部 自然研究グループ
表 溪太：北海道博物館 研究部 自然研究グループ
亀丸由紀子：北海道博物館 研究部 アイヌ文化研究グループ
鈴木明世：北海道博物館 研究部 博物館研究グループ
鈴木あすみ：北海道博物館 研究部 博物館研究グループ

- ②③圓谷（現生・化石貝類、海岸漂着物）
- ④尾曲（民俗）
- ⑤鈴木明世（建築史）
- ⑥亀丸（アイヌ文化）
- ⑦鈴木あすみ（博物館資料学）

（2）これまでの調査実施状況

2018年度に奥尻町教育委員会との打合せ及び事前調査を実施した。その後は、年に2回、およそ3人ずつに分かれ現地調査を実施する計画である。現地調査の時期は、積雪のない時期（主に夏から秋にかけて）と、冬期間（主に1～2月）との2回である。積雪のない時期には海岸での貝類・漂着物等の調査、林道沿いの植物の分布等に関する調査を想定している。冬期間は、雪の上に残る動物の足跡から、島内に生息する動物を特定するための調査や、夏期に比べ漁の回数が少ないこと、また観光客が少ないことから、島民と話す時間を確保できると想定し、聞き取り調査を実施することを想定している。

なお、2019年度はフェリーの欠航により一回目の調査を中止した。2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、道内外の移動が制限された時期があったこと、その時期以外においても感染リスクを考慮した結果、1年間現地調査を中止することとした。

各年度の調査期間（移動日も含む）、メンバーは下記の通り。

①2018年度

奥尻町教育委員会との打ち合わせ及び事前調査を実施。

【1回目】

期間：2019年2月18日～20日

メンバー：小川正人学芸副館長、圓谷、尾曲

【2回目】

期間：2019年2月27日～3月2日

メンバー：表、亀丸、鈴木あすみ

②2019年度

本年度より現地調査を開始。

【1回目】

期間：2019年11月18～22日

メンバー：圓谷、亀丸、鈴木明世

※悪天候により渡航できず、中止

【2回目】

期間：2020年2月13～19日

メンバー：尾曲、表、鈴木明世、鈴木あすみ

※表は17日まで

③2020年度

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、中止

④2021年度

【1回目】

期間：2021年10月26～30日

メンバー：圓谷、尾曲、鈴木あすみ

【2回目】

期間：2022年2月24～28日

※新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため中止

メンバー：尾曲、表、亀丸

（3）アウトリーチ活動

現地での調査期間中、奥尻町教育委員会と協力し、メンバーが小中学生対象の講座の講師を務めている。前述したように、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響により現地調査を中止したため、2022年2月段階での実施回数は2回となっている。

①2019年度

日程：2020年2月16日（日）

講師：表溪太

タイトル：アイヌ文化を学ぼう（「シカ笛づくり・動物の足跡からわかること」を担当）

②2021年度

日程：2022年2月26日（土）

講師：亀丸由紀子

タイトル：「アイヌの伝統的な装いを見てみよう」

（4）調査成果の共有

これまでの調査で得られた情報は、今後各自で論文・学会発表等を行う予定である。その他に、メンバー間、また協力者である奥尻町教育委員会の稲垣森太氏と共有するため、報告会を2021年7月20日にオンラインで実施した。報告内容は、稲垣氏を通じて奥尻町教育委員会にも報告済みである。それぞれの報告内容の一部は次章の通りである。

3 各分野の調査状況

（1）哺乳類・鳥類

奥尻島は最終氷期にも北海道本島と陸続きにならなかったとされている（大嶋 1990）。そのため、陸生哺乳類の多様性が低く、コウモリ類を除くほとんどの種が人によって持ち込まれたものとされている。しかしながら、それらについての継続的な調査は行われていない。そこで今回、奥尻島の哺乳類の生息状況を把握するために現地調査を行った。

奥尻島の小型哺乳類は、齧歯目（ネズミ類）および翼手目（コウモリ類）それぞれ数種の生息が確認されている（太田1956、1968；福井ほか2005、環境省自然環境局生物多様性センター 2010）。齧歯目ではアカネズミ

Apodemus speciosus、ドブネズミ *Rattus norvegicus*、ハツカネズミ *Mus musculus* の3種が生息する。2019年度は森林部と民家周辺を調査地とし、許可を得て小型哺乳類の捕獲調査を実施し、森林部にて2個体のアカネズミを採集した。2021年度は非積雪期に目視による植生調査（樹種）等の調査地周辺の予備調査を重点的に行った。

奥尻島の中型哺乳類としては、タヌキ *Nyctereutes procyonoides*、ミンク *Neovison vison*、ハクビシン *Paguma larvata* が記録されている（北海道 2010、奥尻町史編さん委員会 1997）。中型哺乳類の調査は、積雪期（2019・2020年2月）に奥尻・球浦・青苗地区等の山林を踏査し痕跡の探索を行い、また非積雪期（2021年11月）に路上で車両による走査を行った（図1）。その結果、生息するとされている中型哺乳類3種のものと思われる痕跡を確認することができた。タヌキの足跡、ためフン（写真1）等の痕跡は、調査を行ったすべての地区で多数確認された。ただし、ためフンにはハクビシンのものが含まれる可能性がある。また、車道上で複数のタヌキ個体を目視し、複数の死体（写真2）も発見した。これらのことから、島内にはタヌキがかなり高い密度で生息していることが予想される。イタチ科動物の足跡は、奥尻の民家近くにあった（写真3）。イタチやテ



写真3 イタチ科足跡



写真4 ハクビシン足跡



写真1 ためフン



写真2 タヌキ死体



写真5 ハクガン（左）、オオハクチョウ（右） 富里

ンなどの足跡は類似しており、痕跡だけでは区別が難しいが、これまでの情報からおそらくミンクであろうと予想される。ハクビシンのものと思われる足跡は球浦地区の林道上にあった（写真4）。ハクビシンは東南アジアから移入されたとされており、北海道内にはほとんど分布していないが、奥尻島では過去数件の記録があり（北海道 2010）、今回の調査で現在も生息していることが確認された。今後は、DNA分析等も用いて、これらの種の移入の経緯についても探っていきたい。

鳥類は遭遇した場合に観察記録を随時実施している。2021年度の調査では、奥尻島ではまれとみられるハクガンおよびオオハクチョウの撮影に成功した（写真5）。

（表溪太・鈴木あすみ）

（2）現生・化石貝類、及び海岸漂着物

本研究課題では、①潮間帯及び打ち上げ貝類（現生）、②中期中新世（約1500万年前）の化石貝類、③海岸漂着物を調査対象としている。調査は、2021年10月27～29日に実施した。

まず、①潮間帯及び打ち上げ貝類（現生）では、奥尻島の浅海性貝類相を把握することを目的として、本島東部の東風泊から青苗までの4地点（図1）で調査を行っ



写真6 宮津地区の化石産地の様子



写真7 宮津地区の化石の産状



写真8 青苗海岸の漂着物の様子



写真9 東風泊海岸の様子

た。その結果、50種程の貝類を確認した。本島の浅海性貝類相は、奥尻町史編さん委員会（1997）で73種類、圓谷・鈴木（2020）で75種が報告されており、本結果はこれらと一致するものであった。今後は、潮下帯以深でのドレッジ調査なども行い、本島の貝類相をより詳細に検討したい。

次に、②中期中新世（約1500万年前）の化石貝類では、Uozumi and Fujie（1966）で報告された宮津地区、青苗地区（図1）において、化石産地の現状確認と化石試料の採集を目的に予察的な調査を行った。その結果、宮津地区でのみ、わずかに化石試料を採集することができた（写真6・7）。本試料は、石の中から化石を取り出すクリーニング作業を行っているため、詳細は別途報告することとする。

さらに、③海岸漂着物では、①の貝類調査と同地点で、主に人工物の漂着状況の把握を目的に予察的な調査を行った。その結果、南部の青苗地区で多数の漂着物が確認された（写真8・9）。今後は、漂着物の量や構成などをより詳細に調査したい。

（圓谷昂史）

（3）民俗

本研究課題では、主として戦後の人生儀礼、年中行事

といった基本的事項の聞き取り及び記録を目的としている。これは、調査地である奥尻島を対象とした民俗文化研究は、災害を契機とした民俗の変容に着目したものが中心で、各集落の基本的な民俗や、災害以前の社会的状況によって島民がどのように生活を変化させてきたかは看過されている状況にあるためである。現在までに宮津、稲穂、青苗の各集落（図1）で計8名から聞き取りを実施している。年齢の内訳は60代が女性1名、70代が男女各1名、80代が男女各2名、90代は男性1名である。

2019年度、2021年度に実施した2回の調査で、宮津では正月の行事、稲穂では結婚式、葬式について、青苗では正月、盆、彼岸、結婚式、葬式について聞き取っている。特に葬式については、現在に至るまで島内で隣近所や親戚の手を借り、住民が主体となって執り行っている。日本各地では、業者に委託し隣近所の手伝いはほとんどなくなった、という例が少なくない。そうした状況にあって、かつて日本各地でみられた葬式のあり方が、なぜ奥尻島では維持されているのか、その要因について今後調査を進める。

また、これまでの話者は漁業者及びその家族である。それぞれに対し、漁にかかる技術習得、奥尻島近海での漁業暦、出稼ぎのサイクルについて質問を重ねている。その過程で、80代男性はそれぞれ奥尻島内あるいは近海での漁労のほか、留萌や根室方面への漁業出稼ぎの経験があることがわかった。そのほか、宮津に住む80代の女性1名は青森県のリンゴ農家の出身者であり、嫁ぎ先の集落内に同郷の女性が嫁いでいたことが縁で奥尻島に嫁ぐこととなった。彼女の場合は、近年までリンゴの収穫時期には手伝いのために実家に帰ったり、漁業者である夫が体調を崩したことをきっかけに、本州へ出稼ぎに行っていた時期もあった。さらに、60代女性は島内に高校がないために、本州に出て働きながら高校に通い、卒業後奥尻島へと戻ったという経歴を持つ。

ここに挙げた以外にも、近年では出産や病気等による通院のために対岸の函館市に出なければならない場合もあり、人々のくらしと、島外各地域とのかかわりは現在に至るまで日常にあるものと推測される。今後の調査で、島内で完結していることと島外とのかかわりを持つ必要があること、両方がどのように組み合わせられているかとその変化を明らかにしたい。

（尾曲香織）

（4）建築史

奥尻島における建築史的研究は、1993年の北海道南西沖地震における津波の被災とその復興に関わるものが多く、明治期の入植以降、奥尻島内（特に北部）で育まれてきた集落や住居の形態とその歴史的変遷に関する研

究は見られない⁽¹⁾。それらの形態は、その地域の生活や産業などのくらしのあり方が反映されるものであり、漁業や農業を中心とした生業が行われてきた奥尻島においても、そうした影響を見ることができると考えられる。そこで、本研究課題では、奥尻島内の悉皆的な調査を通した集落形態の類型化と、実測や聞き取り調査を通した土地利用や住居の形態の歴史的変遷過程を探る。その中で、奥尻島内での典型的な間取りや増改築の傾向に「奥尻島らしさ」を見出すことを目指す。それにあたって、尾曲による民俗学的調査の成果も活用していく予定である。

2019年度の調査では、調査スケジュールの関係で島内の悉皆調査は行えなかったが、稲穂の勘太浜地区（写真10）に立地する1940年代建築（1965年頃に大規模な増築）の住居に関して、実測調査を通した住居利用の変遷や、その地区での土地利用の変遷に関する聞き取り調査を行った。そこでは、居間や土間をスルメの干し場としていた等の漁業との関連や、二世帯同居していた際の部屋の使い方等、生業と生活における住居利用について情報を得た。また、旧宅の頃の間取りとの比較や、周辺地域の土地利用や住居立地の変遷過程について伺った。



写真10 堤防上から見た稲穂の状況

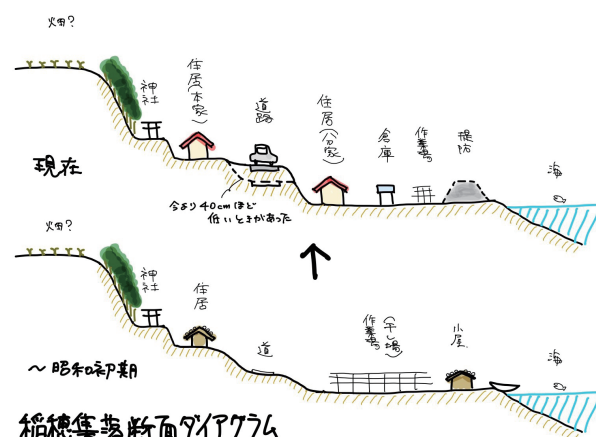


図2 ヒアリングをもとにした稲穂の変遷イメージ
（下図は東風泊の昭和20年頃の写真も参照）スケッチ

稲穂（勘太浜）では、当初、背後の斜面地側に住居を構え、道を挟んだ海側で漁業の作業場（干し場等）があり、家族の拡大とともに、海側にまで住居が立地するようになったとのことである（図2）。当初の状況は、昭和20年代の東風泊の写真とも類似しており、沿岸部に立地する集落の変遷過程の典型と考えられる。

今後の調査では、前述の奥尻島内の集落形態の類型化と、稲穂で得た情報を基盤とした他地区との比較分析を行っていく予定である。

（鈴木明世）

（5）アイヌ文化

明治期頃までの史料には、オットセイやアシカ等の海獣猟のためアイヌが奥尻島に立ち寄った、などの記録・言及が見られるものの、長らく奥尻島におけるアイヌ民族の居住の歴史はないとされてきた。近年、渡島半島及び日本海沿岸のアイヌ文化の歴史については、特に明治以降の状況などが最近の研究によって明らかにされつつあるものの（大坂 2020など）、奥尻島周辺地域を対象とした近代以降のアイヌ文化に関する議論は少ない。

しかし、北海道沙流郡平取町二風谷で1992年に発行された「二風谷アイヌ語教室」の広報紙を見ると、アイヌ文化研究者・工芸家で知られる萱野茂氏（1926-2006）の妻であり、同じく工芸家などとして知られる萱野れい子氏（1931-）が奥尻島で生まれた、という記述があるなど僅かながら奥尻島における近代以降のアイヌ民族・文化について、関連する情報を見つけることができた。

そこで、本研究課題では、奥尻島と主に近代以降を中心としたアイヌ文化の関わりについて、現在の島民の認識や学校教育などを手がかりに、聞き取りや文献資料を中心とした調査を行っている。2019年2月28日に行った予備調査では、奥尻島内の小・中学校におけるアイヌ文化教育の現状について、奥尻小学校3名、青苗小学校2名の計5名の教員から聞き取りを実施することができた（同時に予定していた奥尻中学校への調査は、感染症（インフルエンザ）のため急遽中止した）。結果として、関連する情報が十分ではない状態で学校教育としてアイヌ文化を取り扱うことへの不安の声や、副読本を用いた地域学習の一環として奥尻島のアイヌ文化を取り上げたいものの奥尻にアイヌはいないため授業の題材として取り上げることが困難、などの意見を聞くことができ、冒頭で述べたような従来の認識が現在まで続いていることが確認できた。

今後の調査では、引き続き文献等から奥尻におけるアイヌ文化の情報を主に近代以降に焦点を当て収集・整理し、島民や関連する人物からの聞き取り調査による情報

の補足も行っていきたい。

（亀丸由紀子）

3 今後の予定

実地調査については、2021年度中にあと1回調査を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大にともない中止となった。今後は、2022～23年度にかけて各2回調査を実施する予定である。それに合わせ、奥尻町教育委員会と協力し、行事の実施、奥尻町稲穂ふれあいセンターでの展示を構想している。

各人が調査で得られた結果は、本研究課題が終了した翌年である2024年度までに各種学会、北海道博物館研究紀要やその他学会誌等で報告する予定である。

註

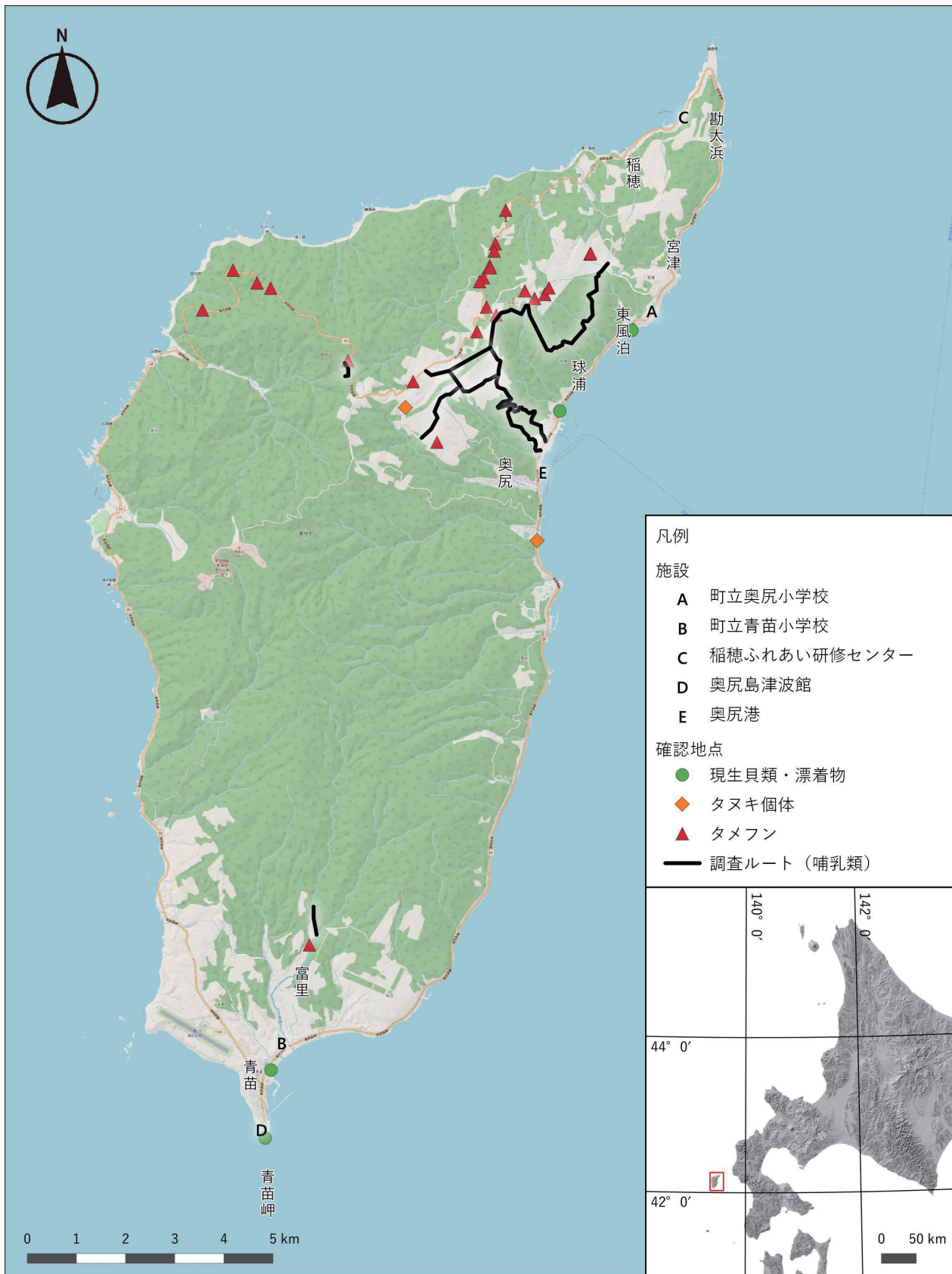
- （1）（葉袋・岡井 2019）では、津波被害の大きかった青苗について、縄文期や江戸期、明治期以降の居住立地の変遷と津波被害の連関について述べている。本研究では、特に明治期以降について、そうした居住立地の背景における生活・産業との関係を見出すことを目指している。

謝辞

奥尻町教育委員会事務局の学芸員である稲垣森太様には島民への調査実施の周知、話者の紹介、畏を設置する場所の紹介など、大変お世話になりました。また、奥尻町教育委員会の皆様にも様々な面でお世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 圓谷昂史・鈴木明彦 2020. 北海道奥尻島の打ち上げ貝類. 漂着物学会誌 18 : 19 -26.
- 大坂拓 2020. 渡島半島のアイヌ社会と民具資料収集者の視野－旧開拓使函館支庁管轄地域を中心として－. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 5 : 47-80.
- 大嶋和雄 1990. 第四期後期の海峡形成史. 第四期研究 29 : 193-208.
- 太田嘉四夫 1968. 北海道産ネズミ類の生態学的分布の研究. 北海道大学農学部演習林研究報告26 : 223-295.
- 太田嘉四夫 1956. 北海道の離島の鼠類. 北海道大学農学部邦文紀要. 2 (4) : 123-136.
- 奥尻町町史編さん委員会 1997. 新 奥尻町史 [上巻]. 奥尻町役場.
- 奥尻町町史編さん委員会 2003. 新 奥尻町史 [下巻]. 奥尻町役場.
- 萱野れい子（聞き手 萱野志朗）1992. 「二風谷アイヌ語教室」『訪問インタビュー』第18回. 北海道沙流郡平取町二風谷「二風谷アイヌ語教室」広報紙第19号 : 175-176.
- 環境省自然環境局生物多様性センター 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集 : 53-88.
- 福井大・河合久仁子・佐藤雅彦・前田喜四雄・青井俊樹・揚妻直樹 2005. 北海道南西部のコウモリ類. 哺乳類科学45 :



181-191.
北海道 2010. 北海道ブルーリスト2010北海道外来種データベース. <http://bluelist.pref.hokkaido.lg.jp>
北海道開拓記念館 1978. 北海道開拓記念館研究報告 第4号
北海道における炭鉱の発展と労働者. 北海道開拓記念館.
北海道開拓記念館 1981. 北海道開拓記念館研究報告 第6号
野幌丘陵とその周辺の自然と歴史. 北海道開拓記念館.
北海道開拓記念館 1988. 北海道開拓記念館研究報告 第8号
離島社会の歴史と文化. 北海道開拓記念館.

北海道開拓記念館 1993. 北海道開拓記念館研究報告 第13号
積丹半島の自然と歴史—人文編—. 北海道開拓記念館.
葉袋奈美子・岡井有佳 2019. 北海道奥尻島における津波と居住の歴史. 歴史都市防災論文集13 : p155-162.
Uozumi, S. and Fujie, T., 1966. Neogene molluscan fauna in Hokkaido. PartII. Description of the Okushiri fauna associated with Vicarya, from Okushiri Island, Southwest Hokkaido. Jour. Fac. Sci., Hokkaido Univ. 4 (Geol. Mineral.) 13 (2), pls.11-13.

RESEARCH REPORT

Interim Report on Remote Islands of Hokkaido Nature, History, and Culture Research Project

OMAGARI Kaori, EN'YA Takafumi, OMOTE Keita, KAMEMARU Yukiko, SUZUKI Akiyo and SUZUKI Asumi

This paper reports on the progress of Hokkaido Museum's "Remote Islands of Hokkaido Nature, History, and Culture Research Project". The project aims to publish findings regarding interdisciplinary relationships between natural science and anthropology on Okushiri Island, from the aspects of natural history and human history. The five-year project will span fiscal years 2019 through 2023, however, we were unable to conduct field studies for fiscal year 2020 due to the novel coronavirus pandemic.

Priority for field studies is given to aspects of natural history which have not yet been the subject of ongoing studies, and require further understanding of their present states. Specifically, on Okushiri Island, we have an understanding of the present state of animals such as mammals and shellfish, fossilized shellfish from the mid-Miocene

epoch (approximately 15 million years ago), and items washed ashore on the beaches. For a historical aspect, we are carrying out field studies to gain understanding of changes in folk customs and housing configurations in this region prior to the 1993 Hokkaido Nansei-oki Earthquake. These changes have not received attention to date. We are also carrying out studies from the perspective of school education to reevaluate the relationship between Okushiri Island and Ainu culture, which has been considered weak until now. Locally, we have performed many types of field studies, interview surveys with local residents and schoolteachers, and measurement surveys of buildings. Through partnership with Okushiri Board of Education, we have presented information gained here at venues including child-oriented events. We also plan to exhibit these findings at museums in Okushiri Town.

OMAGARI Kaori : Folk Life and Industrial History Group
EN'YA Takafumi : Natural History Group
OMOTE Keita : Natural History Group
KAMEMARU Yukiko : Ainu Culture Group, Ainu Culture Research Center
SUZUKI Akiyo : Museum Study Group
SUZUKI Asumi : Museum Study Group
